

各務原市と土  
風化させない戦争  
戦後80年

1. Date: 22 June 1945  
2. Target: Mitsubishi A/C Plant at Kagamigahara (90.20-1833)  
Utsube Oil Refinery, Secondary Target, (218)  
3. Participating Unit: 313th Bombardment  
4. Number A/C Airborne: 28 (17 primary and 6 secondary)  
5. % A/C Bombing Primary: 100% (17 primary and 6 secondary)  
6. Type of Bombs and Fuze: M56, 34 tons secondary  
7. Tons of Bombs Dropped: 34 tons secondary  
8. Time Over Primary: 1015 - 1018  
9. Altitude of Attack: 5000 - 16000  
10. Weather Over Target: 5/10  
11. Total A/C Lost: 0  
12. Resume of Mission: The squadron that  
bombed the secondary target was bombed visually and no photo reconnaissance was obtained. Flak was heavy to moderate and accurate. Claims: 0-1-2. Five B-29s were non-effective. Thirty-four E/I made 54 attacks. Eleven A/C landed. Average bomb load 13,065 lbs. Average fuel usage: 8 gallons.

# 戦後80年 名務原市と太平洋戦争 風化させない戦争の歴史

令和7年度各務原市歴史民俗資料館特別企画展



## 本土空襲

1944(昭和19)年7月、マリアナ諸島が米軍の手に渡ると、そこに建造した飛行場から大型爆撃機B-29が、日本本土を空襲するようになりました。また、本土に近い硫黄島にも小型戦闘機P-51が配置され、本土空襲に加わりました。

## 各務原空襲の実態

任務番号	218	219	228	231
月日	6月22日		6月26日	
目標	1833(三菱重工)	240(川崎航空機)	1833(三菱重工)	240(川崎航空機)
部隊	第313爆撃団	第313爆撃団	第58爆撃団	第314爆撃団
出撃機数	28機	21機	79機	35機
投下爆弾	AN-M66(2t)L.C., AN-M66(1t)G.P.	AN-M64(250kg)G.P., AN-M64(250kg)G.P.		
目標 投下爆弾重量	90t	116t	411.5t	143t
臨機目標 投下弾	—	28t	13.3t	24t
投弾時刻	9:16~9:18	9:19~9:23	9:12~9:55	9:26~10:00
攻撃高度	4,800~5,600m	4,900~5,500m	4,500~5,100m	4,500~5,300m
損失機数	0	1	1	1

表1 6月の空襲内容(米軍資料より)

各務原では、13回の空襲がありました。中でも規模が大きかったのは、1945(昭和20)年6月22日と26日の空襲です。両日ともB-29がB-29が

2回ずつ、合計163機(一部は三重県を空襲)が飛来し、落とされた爆弾の総重量は826tに及びます(表1)。攻撃目標は川崎航空機、三菱重工、航空廠、飛行場、技能者養成所等でした。

## 攻撃目標となつた建物

各務原が空襲で狙われた理由は、飛行場を中心とした航空機産業、航空技術者教育が盛んな町だったからです。6月22日の空襲では2t爆弾で工場群が大まかに破壊され、4日後の空襲では残った建物が250kg爆弾で徹底的に破壊されました。両日で、航空機関連施設の75%以上が失われました(写真6)。

## 爆弾による空襲

岐阜空襲や大垣空襲は焼夷弾で町を焼き尽くす無差別爆撃でしたが、各務原空襲は爆弾で航空機関連施設を狙う精密爆撃が主でした。各務原では227人の尊い命が失われましたが、国の空襲対処措置が「職場死守」から「遠隔退避」へ変更されるとで、速やかな避難により被害が最小限にとどまつたと考えられます。

## 掩体壕の建設とその性格

掩体壕とは、航空機の機体を空襲の爆風から守るためのシェルターで、大きく2種類に分けられます。動員された老人や航空整備学校の生徒が、土を手状に盛り上げて造る無蓋掩体壕、専門工人が発破やセメントを用いて半地下式や洞窟式の囲いを造る有蓋掩体壕があります。共通点は、誘導路で飛行場に結ばれています。

無蓋掩体壕は、本土空襲に備えて造られました。有蓋掩体壕は、本土決戦(上陸戦)に備えて特攻機を隠すために陸海軍の「決号作戦」に基づいて造られました。しかし、完成前に呼びかけ、空襲警報時の消火活動について指導する文書を出しました。しかし、この頃はまだ「当時警戒警報が出されても、窓から空を眺めているだけで避難する人は誰もいませんでした。」という体験談のように、空襲に対する切迫感は無かつたようです。



写真6 爆弾の直撃を受けた川崎航空機本館ビル

現在も、前渡地域には、長根山掩体壕(半地下式)・矢熊山北掩体壕(半地下式)・矢熊山南掩体壕(洞窟式)・写真7)が残っています。



写真7 矢熊山南掩体壕(洞窟式)

## 戦時下の暮らし



写真8 那加駅から出征する兵士を見送る人々(岐阜基地所蔵資料)



写真9 前宮村の警防団・国防婦人会による防火演習(1943年)

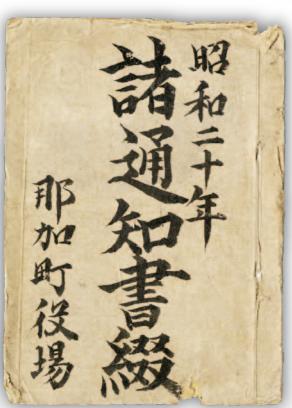


写真10 「昭和二十年 書通知書綴」(表紙)

人も物も戦争へ

日中戦争がはじまった1937年(昭和12)頃から、日本は戦時体制に移行していきます。物価が高騰し、戦時国債の強制購入などで家計が圧迫されました。さらに召集令状が届いた男性は、軍に入隊しなければなりませんでした(写真8)。

「銃後」と呼ばれる、戦場へ直接行くかない人たちも、警防団、国防婦人

会などを組織して戦争へ協力しました(写真9)。金属や食料品などを供出し、また国民徴用令や学徒勤労令などにより、軍需物資や食糧を生産する勤労奉仕に従事しました。

1944(昭和19)年、太平洋戦争において日本が劣勢となり、本土空襲の危険が高まるなど、岐阜県は、消火器具・防火水槽・防空壕の準備を

呼びかけ、空襲警報時の消火活動について指導する文書を出しました。しかし、この頃はまだ「当時警戒警報が出されても、窓から空を眺めているだけで避難する人は誰もいませんでした。」という体験談のように、空襲に対する切迫感は無かつたようです。

同年9月、岐阜県は川崎航空機や航空廠の周辺に住む人々に対して、空襲にさらされる危険性があるため所定の期間内に他所へ移転するよう通達しました。また、翌年4月から5月にかけて鵜沼・大伊木地区では、鉄筋の代わりに竹筋を使ったコンクリート製の防火水槽が製造され、各家の敷地に設置されました。

## 那加町の昭和20年

「昭和二十年 諸通知書綴」(写真10)は、1945(昭和20)年中に那加町役場が主に町内会長宛てに出した文書の綴りです。終戦時、各地で戦争に関する多くの公文書が焼却処分されましたが、奇跡的に残ったこの資料からは、糧増産に関する事、軍への協力依頼、空襲後の対応、また戦後の米軍の進駐に関する通知など、終戦前後の那加町の暮らしの一端を垣間見ることができます。



戦後に払い下げになった東飛行場付近の農家から、新たに航空機部品が見つかりました。この部品は、機体の先端にエンジンを固定するための鉄製フレームです。断定はできませんが、一式戦闘機「隼」のものと推定されます。

丸い形をしているのは、エンジンの気筒が放射状(360度)に配置される、いわゆる星型エンジン用だからです。戦後、航空機部品の多くが金属資源として回収される中、このように残ったことは非常に貴重です。



爆撃機から投下される無誘導(自由落下)爆弾は、弾体、信管、羽根、安定翼からなります。弾体は主に鉄で作られ、内部には炸薬が充填されています。信管は感知部を弾頭に、起爆部を弾底に分けて配置し、電線で繋いであります(弾頭点火弾底起爆信管)。

爆弾は頭を下にして落ちるため、弾頭で衝撃を感じた瞬間に起爆する(瞬発)、遅れて起爆する(遅発)などの設定ができます。羽根は落下中に回転して安全装置を解除し、安定翼は爆弾の姿勢を整えます。



第40教育飛行隊(特攻隊)に所属したと思われる3人は、各務原市内に寄宿して各務原飛行場へ通いました。その道中、村の婦人と顔なじみになりました。

終戦の10日前、彼らに移動命令が下ると別れの挨拶のため、この家を訪ね「もう生きて逢える事はないので、記念の一筆を残しておきます。今僕たちの思いを書いていきます。」と、娘の洋裁の帳面に書き残していました。幸い、彼らの出撃前に終戦となりました。



木製プロペラの両端を切り落とし、中央の軸穴を広げ銅板成形のカップをはめ込んだものです。

側面の刻書「甲式四型戦闘機」とは、フランス製の NiD 29 を中島飛行機がライセンス生産した機体名です。「イ式 300HP」とは、三菱内燃機が国産化したイスパノ・スイザ三百馬力発動機です。「288 昭和4年12月23日」は、製造ロットと製造日、一番下には木製プロペラを生産していた日本楽器製造(ヤマハ)のロゴが刻まれています。



1932(昭和7)年、二十軒駅の南側に陸軍航空本部補給部各務原支部の見習工養成所(技能者養成所)ができました。東北地方から7人の青年が入所した当時、宿舎は未完成でした。そこで、地元の石黒航空廠主計曹長宅へ下宿することになりました。

1939(昭和14)年10月29日、彼らは赴任先の満州へ出発します。その直前に、お世話になった下宿先へ深い感謝の気持ちを込め、自分たちの氏名を記した机を贈りました。彼らが、その後にどうなったかは不明です。

## 戦後の苦難と復興への道



写真11 キャンプGIFU正門前(昭和20年代)

1945(昭和20)年8月15日、GHQの那加大東町・写真11には、外国人相手のバー・クラブなどが出現し、人相手のバー・クラブなどが出現しました。各務ヶ原飛行場にも、アメリカ軍の部隊、400人以上が進駐してきました。「キャンプGIFU」のはじまりです。

### 終戦とアメリカ軍の進駐

1945(昭和20)年8月15日、GHQの那加大東町・写真11には、外国人相手のバー・クラブなどが出現しました。各務ヶ原飛行場にも、アメリカ軍の部隊、400人以上が進駐してきました。「キャンプGIFU」のはじまりです。

アメリカ軍による町の発展に期待しましたが、1953(昭和28)年9月には、アメリカ軍兵士とのトラブルをきっかけに警官が発砲、兵士が負傷するという事件が起きました。町の治安は乱れ、人々の不安も高まっています。

### 航空機産業の停止と復活

GHQは、戦後の日本の再軍備を防ぐため旧日本陸海空軍の解体、各種軍需産業の停止を命じ、各務原の航空機産業も存続の危機を迎えていました。ところが、1950(昭和25)年に始まる朝鮮戦争にはアメリカ軍も参戦し、翌年、日本が国としての独立が認められると、1952(昭和27)年には、日本国内での航空機産業の再開が認められました。まずはアメリカ軍機の整備や修理が開始され、各務原の航空機産業は第二次の誕生を迎えます(写真12)。

キャンプGIFUとなっていた旧各務ヶ原飛行場は、1954(昭和29)年に発足した自衛隊の補給基地に指定されました。1958(昭和33)年には、飛行場が日本に返還され、自衛隊岐阜基地が発足します。しかし、基地周辺に響く航空機の騒音は激しく、また、1970年代に基地へ地対空ミサイルの配備が発表されると、平和を願う市民による激しい反対運動も展開されました。

一方、1962(昭和37)年に始まる岐阜基地航空祭は、10万人以上が訪れる市内最大のイベントです(写真13)。航空機を間近で見られ、ブルーインパルスチームの高度な飛行技術が披露されるなど、航空機の町を実感できる催しが毎年開催されています。

### 歴史を伝えていくために



写真12 アメリカ軍機のオーバーホール(昭和20年代)



写真13 岐阜基地航空祭(2018年)

## 資料から見る各務原市と太平洋戦争

No.10



軍用資材で子供たちに夢を

このランドセルは、戦後間もないころの子どもたちが使ったものです。素材は、皮ではなくビニールや布です。終戦後の混乱期、物資不足の時代に、残っていた兵器用の資材を利用して作られました。

製造したのは、各務原市に本社を置く高安株式会社の前身、高安合資会社。全国に工場を持ち、戦前・戦中は火薬袋やパラシュートなどを生産しました。戦後は会社存続のため、残った資材を利用してランドセルのほか、布製のミットやグローブを作りました。

No.11



戦後の悲劇(納得できない結末)

1945(昭和20)年3月9日、茨城県内で米軍のB-29が墜落し、生存した搭乗員3人は捕虜になりました。重症の1人は東京へ運ばれます、殺されます。この時、身柄を預かった憲兵隊の中に、本川さんがいました。

終戦後、妻の実家のある関ケ原町へ復員した本川さんは、家族との日常を取り戻しました。ところが1か月後、GHQに連行されます。その後は、横浜裁判にかけられ、3年後に彼だけが戦犯として絞首刑になりました。ご本人は、最後まで諦めずに無実を訴えました。

※資料は各務原市在住のご遺族から借用

この事業は「とくしま地域振興協力基金」の助成を受けております。

令和7年度  
各務原市歴史民俗資料館特別企画展  
戦後80年 各務原市と太平洋戦争  
～風化させない戦争の歴史～  
開催日 令和7年8月9日(土)～8月17日(日)  
会場 産業文化センター1階  
主催 各務原市教育委員会

No.7

さいしんえい  
最新鋭の航空機部品が  
「くず入れ」に

三式戦闘機キ61「飛燕」のスピナー(プロペラ中央部のカバー)を、鵜沼第一小学校の「記念館くず入れ」に転用したものです。スピナーを逆さにし、台座の代わりに車輪のホイールがボルトで固定してあります。

当時の航空機部品はほとんど消滅しており、用途転用されて残ったスピナーの資料的価値は非常に高いものです。一方で敗戦という出来事が、最新鋭の航空機部品を「くず入れ」の価値に変えてしまったことを、この資料が物語ります。

No.8



敵国の軍隊が我が町へ

戦後、進駐軍を相手にした土産物店の看板です。「営業時間 平日 15時～21時 土日 13時～21時」と記されています。

1945(昭和20)年に戦争が終わったとはいえ、日本は敗戦国でした。敵国であったアメリカの兵隊が、今度は占領軍として自分たちの町へやってくるという大きな不安を、各務原の住民は抱きました。

治安が乱れることも確かにありました。一方では子どもたちとの交流、雇用や消費拡大という経済効果をもたらしました。

No.9

かわさき  
生き残りをかけた川崎

日本が敗戦すると、飛行機の生産は全面的に禁じられました。川崎航空機は、会社存続のため川崎産業と改称し、日用品の製造販売を始めます。

この金属製の鍋は、川崎産業の社員が前渡の民家を訪問し販売したもの。素材は、戦前に航空機部材に使用されたアルミニウム鋳物の端材を組み合わせたものであることが、分析の結果から推察されています。本体は金属板を叩き出して成形し、取っ手は航空機と同様にリベット打ちで固定されています。